

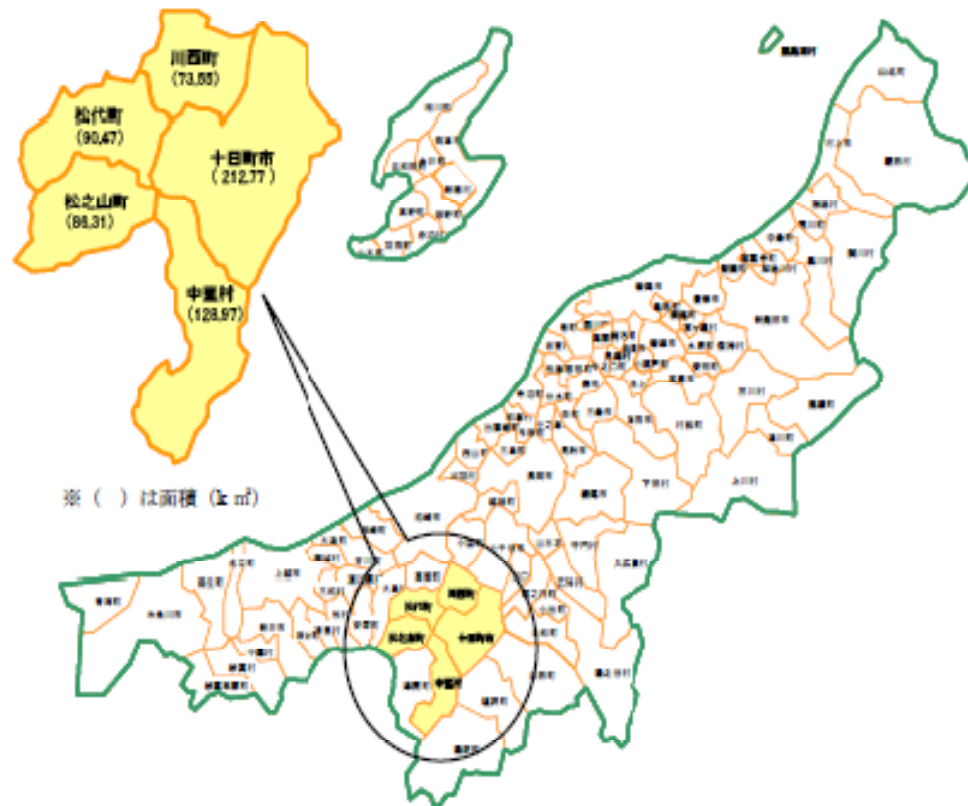
総務省 緑の分権改革推進会議 第1分科会
「鉢 & 田島征三 絵本と木の実の美術館」 報告



平成22年10月12日 新潟県十日町市

1 新潟県十日町市の位置

【図表 1.1 5市町村の位置図】



面積: 590km²
人口: 60,219人
世帯数: 20,056世帯
集落数: 438集落
(平成22年9月末現在)

越後妻有(つまり)地域
(十日町市)

平成17年4月1日合併
旧十日町市・旧川西町・旧中里村
旧松代町・旧松之山町が合併し
新市十日町市となる。

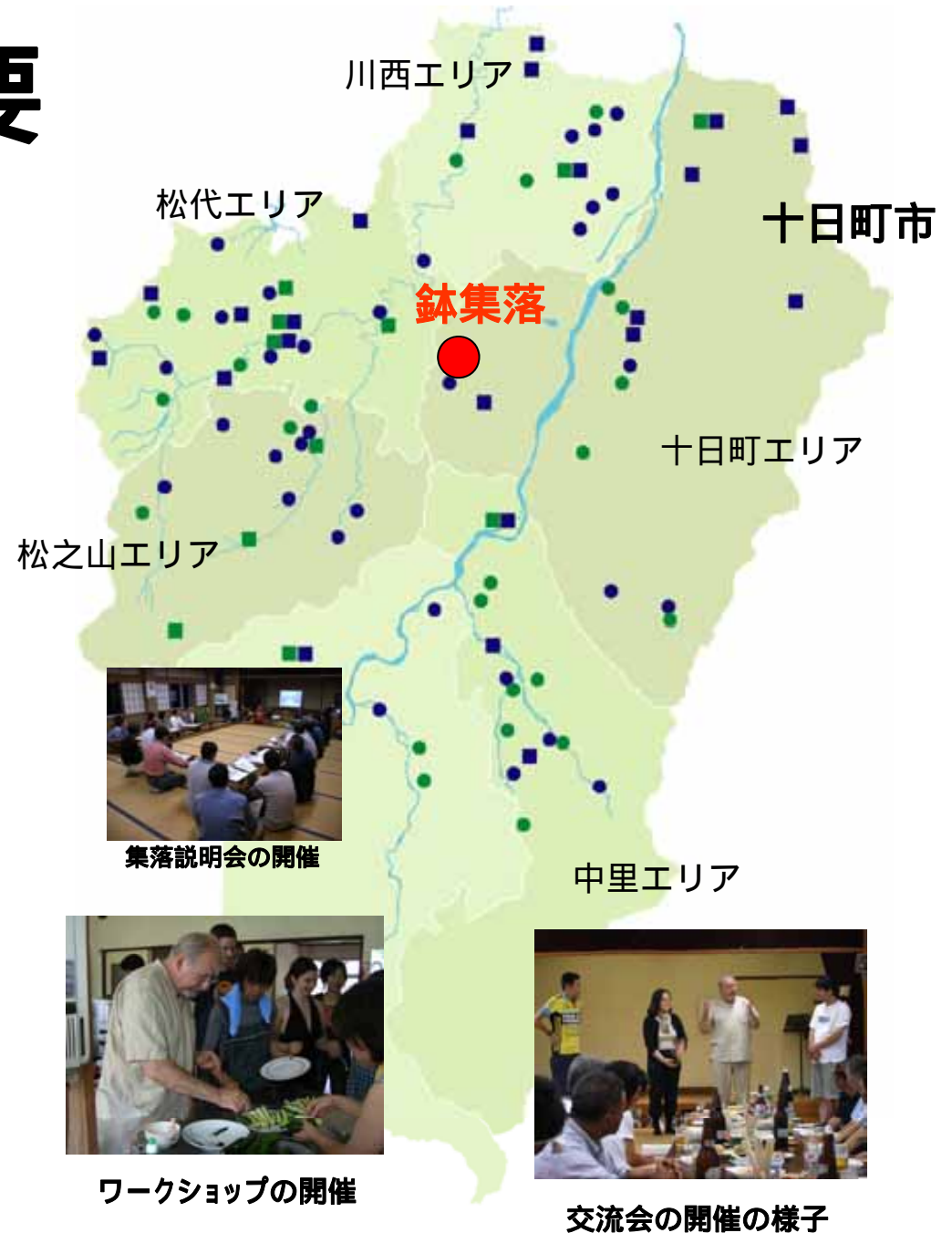
2 鉢集落の概要

● 鉢集落(十日町市真田甲)

十日町市の中央部分に位置した山間部の集落で、集落名の通りすり鉢状の土地形状をしている。集落内は石仏と呼ばれる市文化財があり、祭りなどの催しが行われている。兼業農家が多く、勤めに出ながら農業を営む。集落の運営にあたっては、いくつかグループがあり、それぞれが一丸となって行事に取り組んでいる。全員が尾身姓という特徴もあり、団結力が強い。集落外から人が遊びに来ることを喜び、非常に社交的な集落である。

大地の芸術祭には、第一回展より自主的に参加しており、これまでに数多くの作家とつながりがある。海外の作家が長期滞在したときにも、面倒を見ながら付き合ってきている。作家は、芸術祭の時だけでなく、お祭りなどの行事にも参加し、交流を深めている。

過去に鉢集落に関わったアーティスト
ブルーノ・マトン(フランス)
伊島薫
水内貴英
ヴィヴィアン・リース(カナダ)
堀浩哉
伊藤嘉朗
リナ・ナバジー(インド)



集落説明会の開催



ワークショップの開催

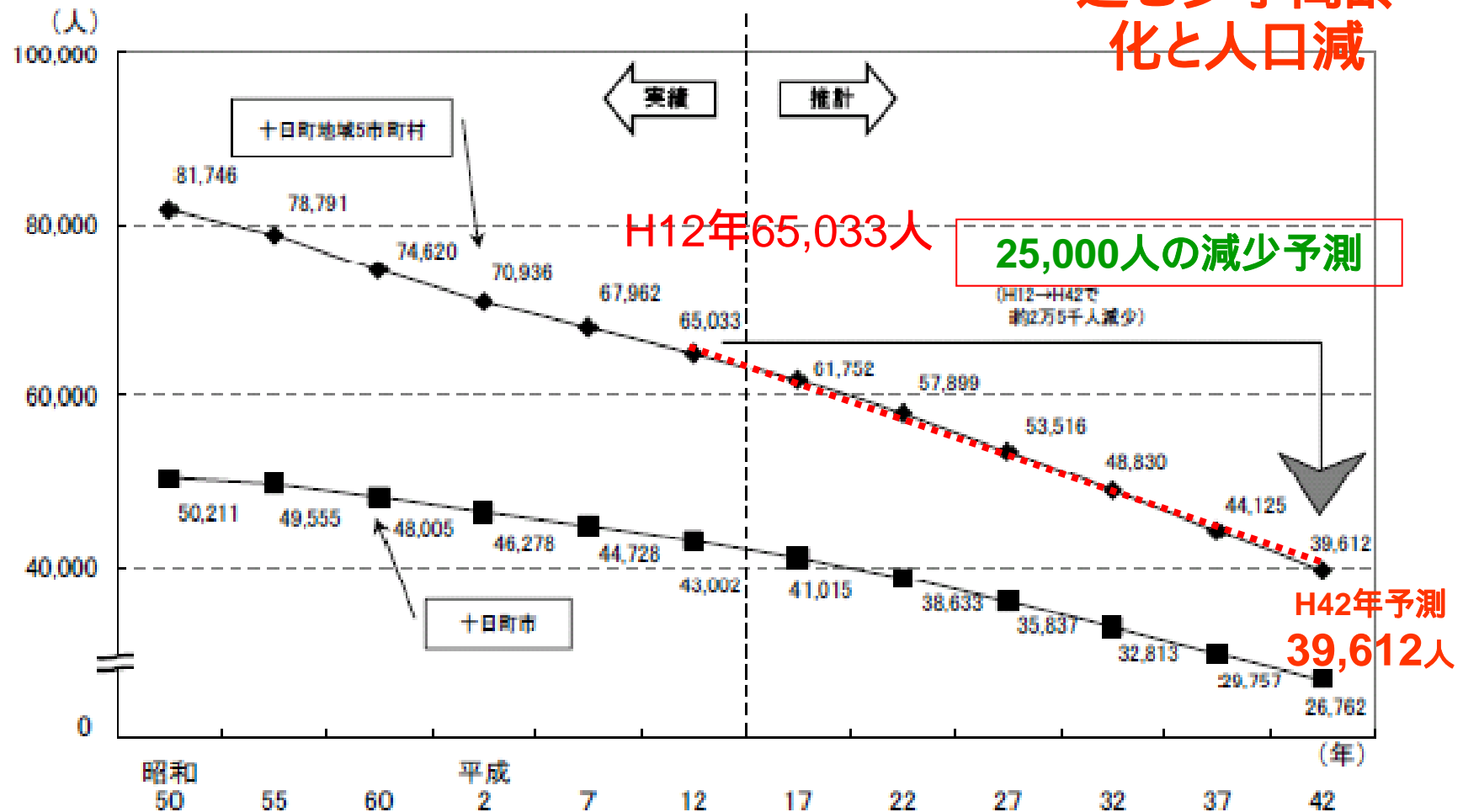


交流会の開催の様子

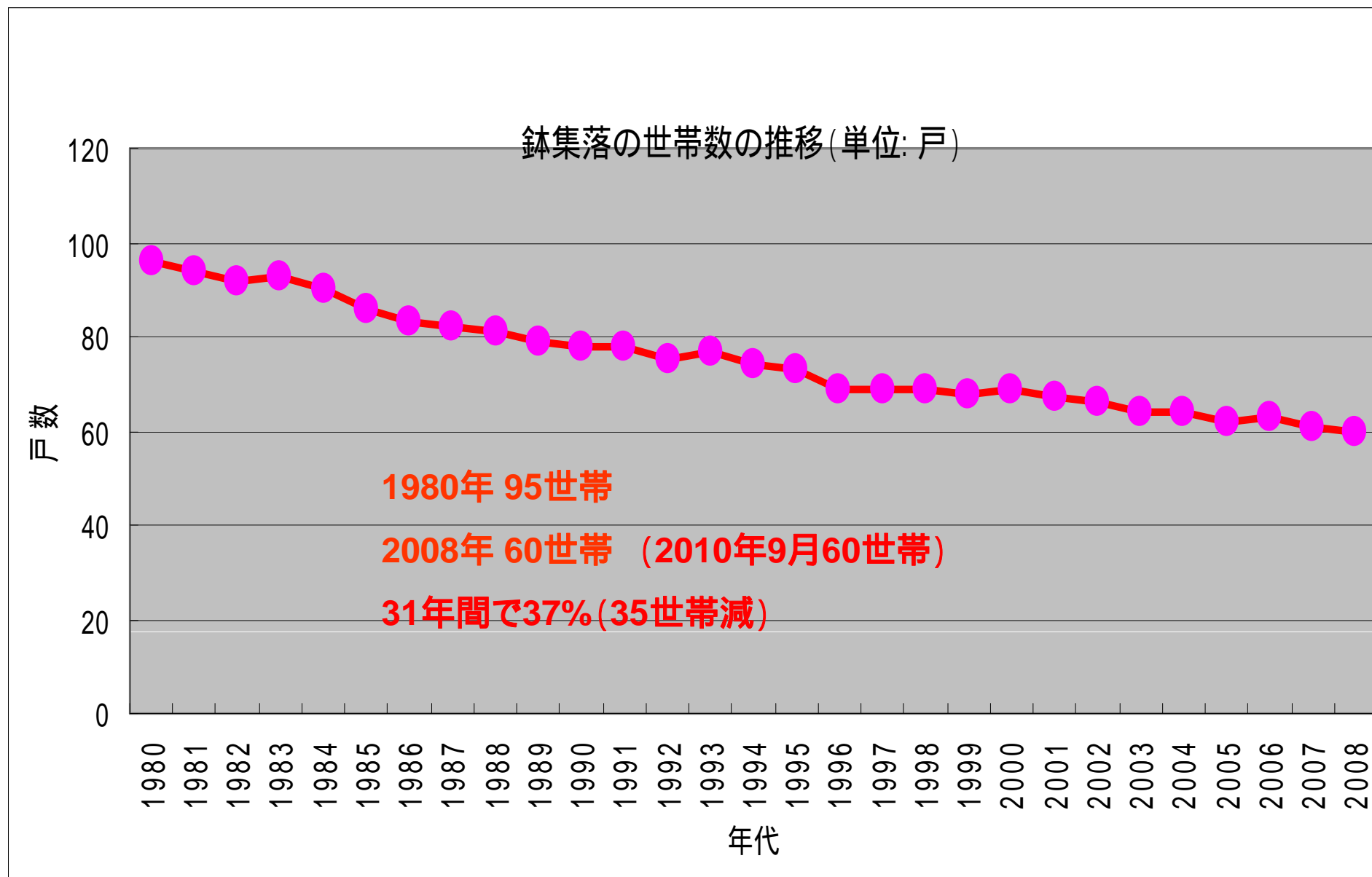
3 十日町市の将来人口推計

【図表 1.9 5市町村の人口推移と将来推計】

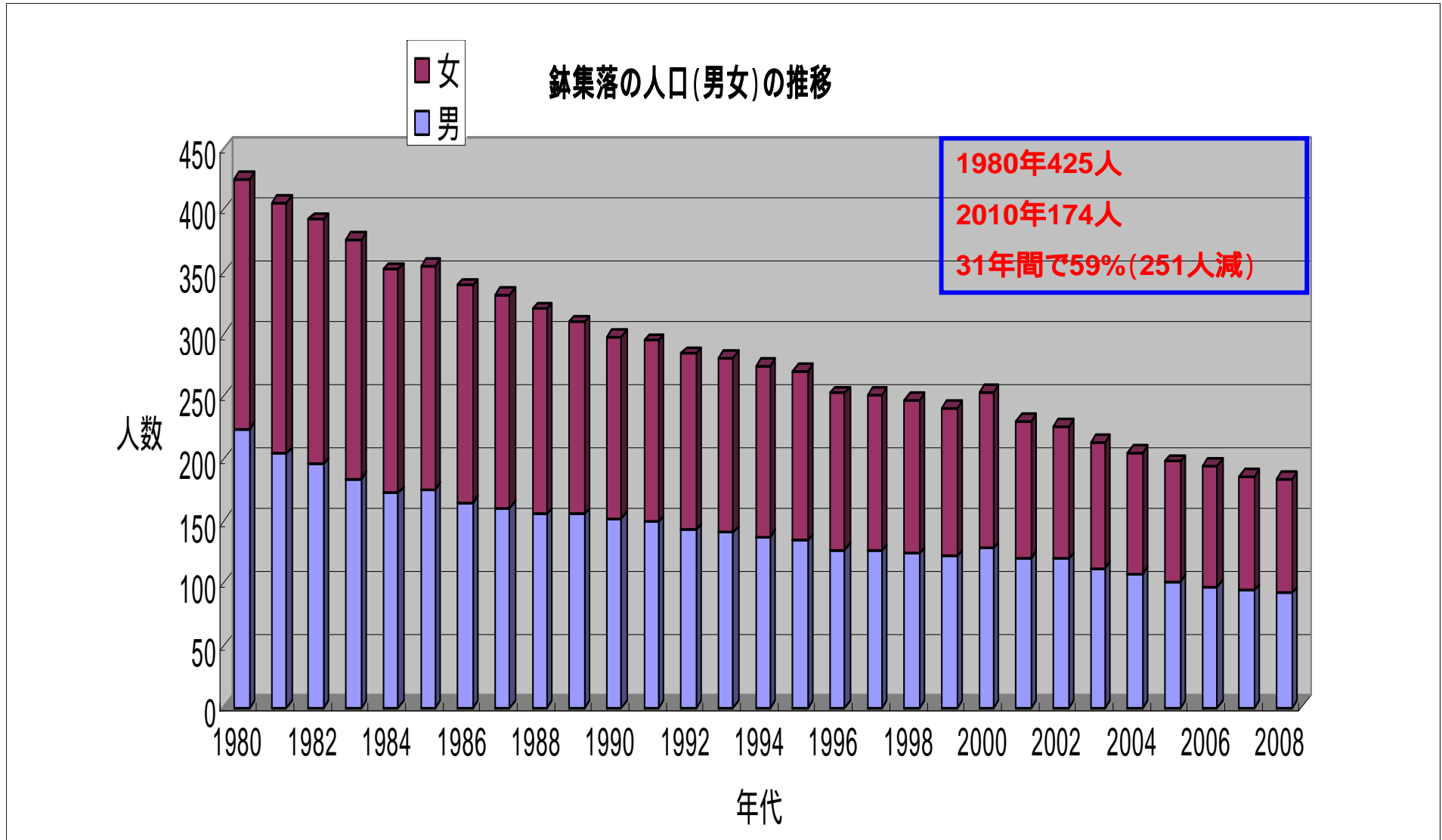
進む少子高齢化と人口減



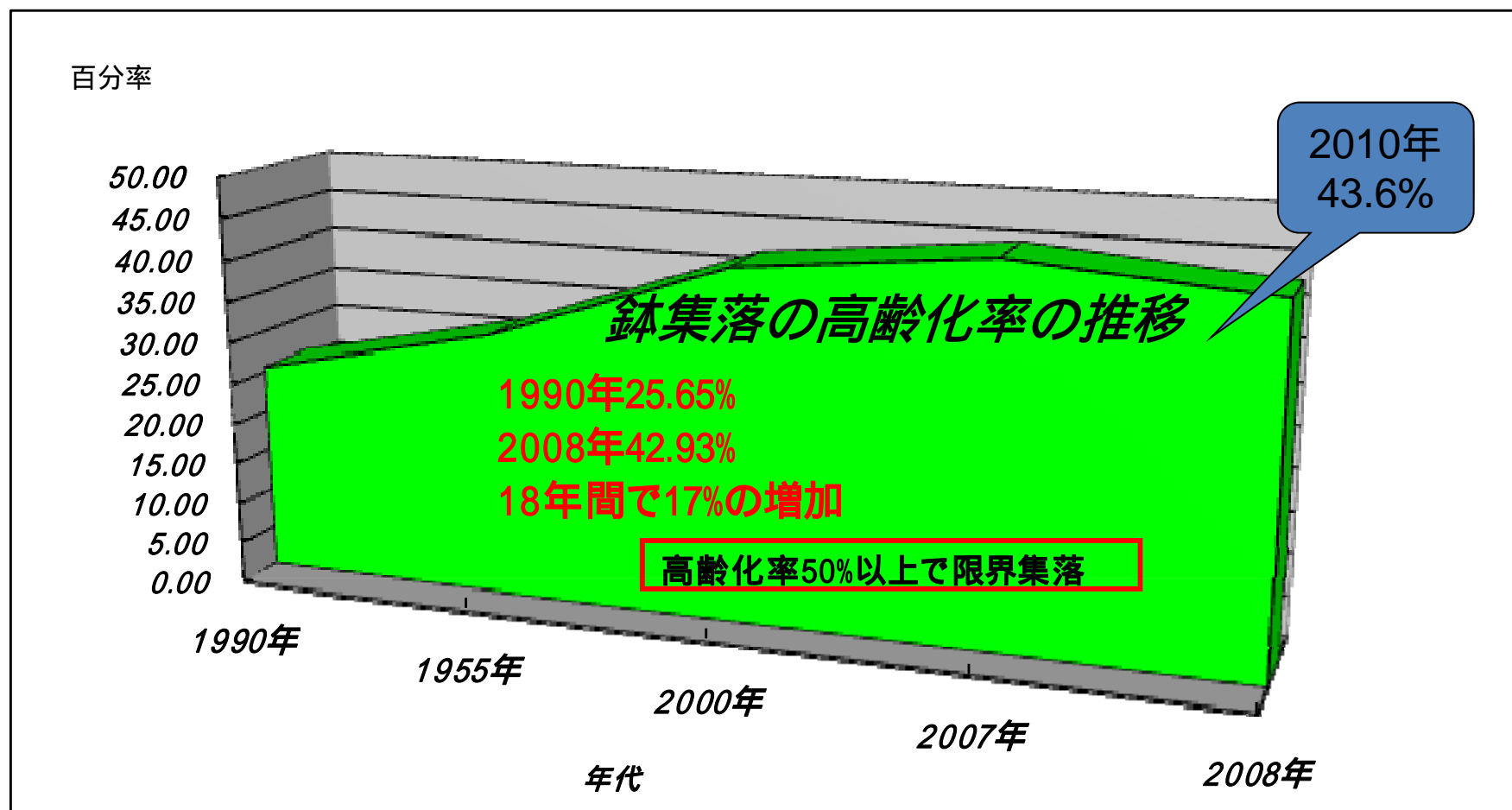
4 鉢集落の世帯数の推移



5 鉢集落の人口(男女)の推移



6 鉢集落の高齢化率の推移



7 鉢集落 & 田島征三 絵本と木の實の美術館の取組

平成21年 第4回大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2009 に開館した中核となる施設

鉢 & 田島征三 絵本と木の實の美術館



流木を集め
作品を創る



絵本と木の実の美術館
今夏、開館2年目で入館者数4万人へ



作品制作
地域の皆さんと地域外の
サポーターとが関わりあって
作品制作を手伝う
地元のお年寄りの知恵、
手先の器用さに助けられる
ことが多い

美術館受付
地域内外の多様な人が関わる





- 絵本と木の実の美術館
- (旧真田小学校)
- 平成17年3月廃校
- 1,179m²校舎・体育館・地階
- 所有 平成18年NPO法人
越後妻有里山協働機構

8 緑の分権改革推進会議 調査事業

(1)これまでの地域活性化への取組内容

■美術館のある集落・十日町市鉢 の現状

- ・平成22年9月末人口174人(男89名女85名)
世帯数60世帯 高齢化率 43.6%の集落
(50%で高齢化集落)
- ・平成17年3月末に鉢地区内に唯一あった
真田小学校が廃校となり、集落のコミュニティ
と活力の低下が一層顕在化



■鉢集落の地域活性化への取組み

- ・集落の若手が中心の**地域おこしグループ「鉢未来フォーラム21」**が核となって、第1回大地の芸術祭から参加・協力し、過去3回7名のアーティストを受入れてきた
- ・作品制作のサポートを通じ、3年に1度の夏の賑わいと、アーティストやサポーターとの交流を生んできた
- ・2009年度の第4回大地の芸術祭 「絵本と木の実の美術館」誕生
田島征三氏により、地域の出来事を題材とした絵本の世界が、廃校となった小学校校舎全体に展開
また、地域外からゲストを招いてのコンサートやトークショーなど幅広いプログラムを実施

(2) 調査事業の進捗状況 №1

美術館内の作品を手掛ける絵本作家・田島征三氏は環境保全への意識が高く、展示するアート作品を通して環境問題に対するメッセージを発信し、美術館を通して出会う多くの人々へ届けることを作品制作のテーマに据え、地域と関わり作品を展開。



緑の分権改革推進に掲げる

「地域資産の価値等を把握し、最大限活用する仕組みを創り上げていくことにより、地域活性化、絆の再生を図り、「地域から人材、資金が流出する中央集権型の社会構造」から「地域の自給力と創富力を高める地域主権型社会」への転換の実現」

を目指すうえでの課題を、これまでの鉢集落での取組みを通じ設定 →申請 →採択



<調査事業で取組む課題>

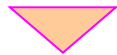
- 3年に1度のトリエンナーレ開催時以外も、通年で地域外の来訪者との交流を育めるようなプログラムづくり
- 地域のお年寄りが持っている生活の知恵、自然と共に生きてきた里山の暮らし、循環型社会づくりの知恵を、単に紹介するだけでなく、アート作品を通じて、特に子ども達が体感できる環境づくり

(2) 調査事業の進捗状況 №2

「緑の分権改革推進会議」調査事業における具体的目標3つと現在の進捗状況

① 多様なネットワークによる対外交流人口の増加

絵本作家・田島征三、集落組織、絵本と木の実の美術館友の会会員を中心に、幅広いネットワークづくりと交流の促進



<現在の取組み状況>

■ 友の会： 10月現在の入会者数20名。会員は県外在住の方が75%

■ 対外交流増へ向けた取組：

九月中旬 友の会会員を鉢集落に招待、手刈りの稲刈り体験会実施
友の会会員交流会を、2011年の2月下旬、十日町雪祭りの会期中に行い、作家による作品解説や、地域の歴史文化の象徴でもある縄文文化についても周知するため、十日町博物館への縄文土器鑑賞ツアーを実施予定

■ ネットワークを広げるための情報発信：

友の会入会案内、7月より美術館内に設置。

9月、全国にいる鉢&田島征三・絵本と木の実の美術館制作サポーター、スタッフや、各教育機関、絵本出版関係者などに幅広く配布

10月、「美術館通信」第1号を発行、全国的に配布する予定。同時に、友の会会員には特典として鉢集落の新米1キロを贈呈

(2) 調査事業の進捗状況 №3

②アート作品を通しての集落の水源保持・地域の特色発信 地域の環境を生かしたアート作品を通じ、地域の環境へのまなざしの育成

<作品の意図>

- ・ 集落の水源でもある清水を貯水し、この水を用いて美術館の象徴的な作品「**ぱったりぱった**」(ししおどし)を動かし、この動きが体育館の作品を動かす動力となっている
- ・ 美術館玄関前で、注ぐ水音と共にゆっくりと動く「ぱったりぱった」は、子どもたちに大人気で、作品の動きを通して、自然が生み出す動力を楽しみながら感じられる
- ・ この水源は、長年眠っていたもので、水源が美術館補修工事の際に偶然掘り起こされ、これを活用
- ・ 農村にとって、長きに渡り利用されてきた水源を守ることは、ここで生きていくことの象徴として、また生活の基盤としての未来を繋ぐことを意味する
また、全国各地からの来館者に対し、「**今そこにある失われかけた財産を活かして新しい価値を創る**」ことを作品への驚きと関心、楽しさ、興味から感じていただく意図をアーティストが明確に伝えている

(2) 調査事業の進捗状況 №4

<現在の取組み状況>

■ 水源復旧工事について:

鉢未来フォーラム21を通し、集落の主要人物に水源保全工事、事業説明
水利権はナーバスな問題であり、農作業が一段落する収穫期以降(10月
下旬以降)、集落全体への説明会を行う予定。鉢区長の承諾、協力とともに
調査開始

■ アート作品「太鼓の部屋」の制作

制作期間: 7月～11月

制作状況: 70%程の仕上がり。夏休みにあわせて仮設展示。年内には完成
予定

入館者が自ら自転車をこぎ、その動力で作品である流木のオブジェ
が、かつて学校で子ども達が叩いていた太鼓を叩く

今後二回に分けて改善作業を行い、年内で終了する予定



太鼓の部屋
自転車をこぐ 流木のオブジェが太鼓をたたく

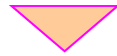


ばったり
ばった
(集落の
清水を
使った
ししおどし)

(2) 調査事業の進捗状況 №5

③ 未来を担う子供たちへ地域文化の伝承

アートによって地域文化を新しい角度で見直した、新しい教育プログラムづくり
廃校の活用方法についての新たな提案づくりと課題提起



<現在の取組み状況>

■ コンサートやギャラリートークなどのイベント

- ・ 大地の祭り2010 (8月1~31日) 来場者数 : 2,729人 (1日平均88人)
- ・ ヒネモス大演奏会 : 10月23日(土)開催予定
廃校となった学校に眠っていた楽器たち、リコーダーやアコーディオン、木琴、ピアノカなどを使って「大人になった運動会の鼓笛隊」をコンセプトに全国で活動する音楽集団「ヒネモス」の演奏会。
市内中学校の吹奏楽部も共演する
- ・ 2010夏小室等 こむろゆいコンサート(8月16日)
- ・ きむらゆういち & 田島征三ギャラリートーク~オオカミのじかん~(8月15日)



2010夏
コンサート
小室等・こむろゆい



2010夏
トークイベント
きむらゆういち & 田島征三

(2) 調査事業の進捗状況 №6

■ 藁(わら)細工体験教室

米俵の蓋として利用されていた「さっぺし」という藁細工を、市内の小学生、圏外からの来館者や地元集落の若い世代に伝承する場を設ける。

以前から地元の村民の要望もあり、昨年試験的に教室を開いた。村の伝統行事、祭事に使われる草木にまつわる技術を、絶やさぬよう、また通年で行事化できるようなワークショッププログラムをつくる

- ・九月中旬、美術館友の会会員を鉢集落に招き、手刈りの稲刈り、藁を集めた
- ・11月ならびに2月のおかまち雪まつりの会期中に、美術館にて、村人を講師とした「さっぺし作り体験教室」を開催予定

■ こどもたちへの周知

- ・8月に十日町市生涯学習課の協力で十日町市内の幼稚園保育園、小中学校に美術館のチラシを配布
- ・美術館に来館された方に、鉢集落のことや旧真田小学校のことを伝えるためのパンフレットを田島征三さんの協力を得て作成し頒布。
インターネットや雑誌など断片的な情報で来館して下さったお客様に、この地域のことをより判っていただくためのアプローチを開始



地域に伝わる藁細工「さっぺし」づくり体験

こどもたちとのワークショップ



美術館パンフレット



美術館のレストラン
地域の方々も遊びに来る

(3) 調査事業の課題ならびに課題への対応策の検討や提言 №1

① 多様なネットワークによる対外交流人口の増加

絵本作家・田島征三、集落組織、絵本と木の実の美術館友の会会員を中心にした、幅広いネットワークづくりと交流の促進

▼ 課 題

- ・ 会員数が伸びない
- ・ 周知方法に限られる。基礎自治体や地域の団体、NPOの組織規模では周知手段、予算に限界がある
- ・ 全国的な規模で配布出来るネットワークの構築

▼ 対応策の検討、提言

- ・ 一般的な美術館の友の会組織との差異性を伝える上で、この地域の諸活動等について体験いただくことを重視した周知に務める
- ・ 国の補助事業、助成金採択事業の活動を各地で報告できるような、ネットワーク構築会議の創設など、各地域で努力する団体同志が情報交換をしあえるような場づくりを国の主導で進めていただけるよう望みます。

(3) 調査事業の課題ならびに課題への対応策の検討や提言 №2

②アート作品を通しての集落の水資源保持・地域の特色発信 地域の環境を生かしたアート作品を通じ、地域の環境へのまなざしの育成

■ 水源復旧工事、アート作品の制作について:

▼ 課題

- ・ 今夏のような猛暑の場合、集落における水資源の問題は田畑への水量の確保など、水利権の問題はよりナーバスとなる
- ・ 冬期の湧き水利用方法として、ホースを整備し、融雪に活用できないか、との要請が集落へのヒアリング時に出てきた
- ・ 里山の暮らしは一朝一夕で成り立ってきたものではなく、かつ、天候変化と共に自然環境も変化するため、自然と折り合いを付けながら共生してきた生活に根ざしたテーマへの取組みは、事業申請時に組み立てた予定どおりに進捗できない可能性を含む
- ・ 半年ほどの事業調査期間では、水資源や環境など生活と密接に関連する事象の場合、住民との調整に時間をかけるため、一定の成果を導き出すことが難しい

(3) 調査事業の課題ならびに課題への対応策の検討や提言 №3

■ 水源復旧工事、アート作品の制作について:

▼ 対応策の検討、提言

- ・ 水利権は非常にデリケートな問題なので集落との対話を慎重に進める必要がある。区長への説明を丁寧に行い、承諾、協力とともに、調査を開始する。
- ・ 自然エネルギーなどをテーマとし、地域に根ざした取組みへの国からの支援については、単年度予算型の事業スキームから、実態にみあったスキームを検討いただけるよう望みます。
- ・ 地域にあるものを活かし、通年で来訪者を迎えるためには、常時作品や施設を良い状態でメンテナンスし、ブラッシュアップしていくことが重要です。
このための支援、助成制度については現在は各省庁ともメニューが非常に限られています。
新規施設建設以外にも、地域の実情にあった財産再生、活用計画を有する場合の補助支援制度の創設や、地域の小さな活動の現状をより知っていただき、例えば交付税措置対象事業の見直しなど、政策に具体的に結び付くような意見聴取の機会を望みます。

(3) 調査事業の課題ならびに課題への対応策の検討や提言 No.4

③ 未来を担う子供たちへ地域文化の伝承

アートによって地域文化を新しい角度で見直した、新しい教育プログラムづくり
廃校の活用方法についての新たな提案づくりと課題提起

■ イベント実施や藁細工体験教室開催ならびに廃校などの利活用

▼ 課題:

- ・ 教育機関への情報提供は、縦割り型行政の弊害が大きく出るものと感じている。近隣自治体の教育機関などへの情報提供や、県全体への周知はもとより、県外教育機関への呼びかけ方法、ネットワーク作り、教育機関関係者との連携が必要である。
- ・ ワークショップは、時間をかけて子ども達との時間を共有していくものであるため、受講希望者が許容範囲を超えた場合に、講師の不足が予想される。集落外からの職人の協力を得ていく必要がある。
- ・ 廃校となった学校などの公共施設の多くは、耐震化補強工事などが行われることなく、集落の中心地に人の集うことのない空間を作り出している。施設再生、活用のための基盤工事、施工に対して、基礎自治体では事業実施の優先順位は極めて低く、予算措置されることが無い。

■ イベント実施や藁細工体験教室開催ならびに廃校などの利活用

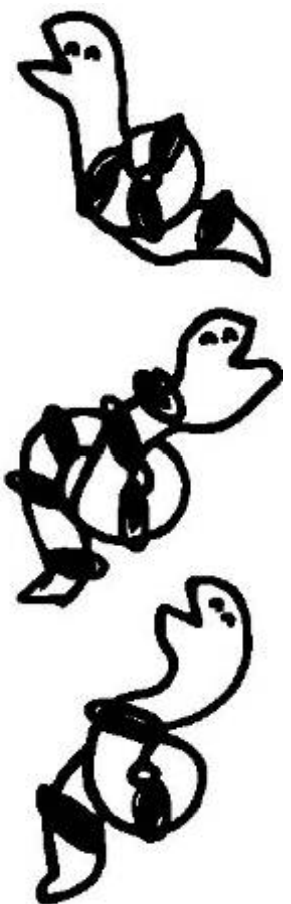
▼ 対応策の検討、提言

- ・ 大地の芸術祭開催時には、県教育委員会を通じて、県内全ての小中学校への鑑賞パスポート無料引き換え券付きの広報用チラシを配布。こうした、ネットワークを活かしていけるよう、県への働きかけを継続していきます
- ・ 過疎化、高齢化が進む集落では、一集落、地域での取組みの継続は、地域の受入側の負担が大きくなり疲弊する事例が多くみられます。
広域的な視点で地区単位でのワークショップに対応できる人材の育成や、地域外の多様な人材が緩やかに関わり合える仕組みづくりが必要です。
特に地域外の若者が、集落の活動にサポーターとして関わることで、「越後妻有・大地の芸術祭」は様々な活動の可能性を広げてきています。こうした、若者が地域外から里山に通う場合の高速道路料金の無償化や、農林水産省補助事業などで地域に設置された農村環境改善センター等、地域、集落が管理する施設を宿泊施設として認可するなどの規制緩和や制度の創設を望みます。
(地域おこし隊員が、制度満了後、地域定住ではないものの地域と関わり続けるケース等への想定も検討できるのではないかと考えます。)

■ イベント実施や藁細工体験教室開催ならびに廃校などの利活用

▼ 対応策の検討、提言

- ・ 教育機関として利用されなくなった廃校施設は、施設が利用されていた頃に行われていた周辺の集落関連施設やインフラの機能も低下する。こうした周辺施設等の維持保全活動も含め、廃校施設を核とした地域再生計画への総括的な国の補助、支援制度を検討いただけるよう望みます。
- ・ バリアフリー法の適用指導は、ハード面での条件設定が厳しく廃校等の再生、利活用の設備投資経費が大きくなります。ハード整備のみならず、ソフト面でのバリアフリー、ユニバーサルデザインの観点で、人的サポートを地域の人々と作っていくような取り組みへの評価、支援を望みます。
- ・ 市町村合併が進み、基礎自治体のサイズが従前より大きくなっている地域の現状では、きめ細やかな住民ニーズの把握や、地域再生のための活力となる人材の発掘などに、「新たな公」としてのNPOや民間団体等と、基礎自治体とが連携して持続可能な事業展開を行っていく必要があります。
このために、認定NPO制度の要件緩和など、地域に根ざした「新たな公」を担う団体の活動を制度面で支援する動きを、より活発化頂けるよう望みます。
また、財政基盤が脆弱な地域団体では、国の助成金、補助金が事業完了後の精算払いであるため、申請を躊躇する場合があります。前払い制度の検討、または無利子融資、財政基盤が確立しているファンドの創設を望みます。



絵本と木の実の美術館
でまたお会いしましょう。

結び